

乳房超音波検査の併用検診が有用であった微細石灰化巣を伴う非浸潤性乳管癌の1例

◎竹山 ゆり花¹⁾、笹川 美香¹⁾、刑部 孝枝¹⁾、廣瀬 和美¹⁾、齋藤 晴義¹⁾、諏訪 香¹⁾
聖隷予防検診センター¹⁾

【背景】乳がん検診において、微細石灰化巣を伴う非浸潤癌の検出には通常マンモグラフィ（以下 MMG）が有用とされている。今回、併用した乳房超音波検査（以下 US）により診断に至った1症例を経験したので報告する。

【症例】39歳の女性。MMGとUSを併用した乳がん検診を受け、USで右乳房8時方向の乳腺末端部付近に、点状高エコーを有する11mm程度の境界不明瞭な低エコー域を指摘した。また、同日実施したMMGでは、これに相当すると思われる部位に淡く不明瞭な石灰化巣がごく少数認められるのみであり年齢も考慮し、総合判定では精査不要とされた。後日、判定医と検査技師の症例検討において、乳房超音波診断ガイドラインに沿って再評価した結果カテゴリー3から4となり、悪性を否定できないため6か月後に再検査となった。再検査時には同部に15mm大の腫瘤を触知し、US上も点状高エコーを伴う低エコー域の拡大と乳頭方向への進展が明瞭となっていた。また、MMGでも石灰化巣は多形性で区域性分布に増加しており、造影MRIでも同部に相当する区域性の染まりがみられた。施行した針生検

で非浸潤癌の診断となり、乳房部分切除術が施行された。最終的な病理組織結果は非浸潤癌（TisN0M0stage0）であった。

【考察】今回の症例はUS所見が非腫瘍性病変としてみられる典型的なものではなかった。また、病変がMMGのブラインドエリア付近に存在しており、微細石灰化巣を伴う非浸潤癌の典型的な石灰化巣としてとらえることが困難で、初回判定では精査不要とされた。しかし、判定医と検査技師でUS所見を乳房超音波診断ガイドラインに沿って再評価することで正確な診断に結びついたものと思われる。

【結語】一般的に微細石灰化巣はUSに比べMMGの検出感度が高く診断に有用であることが多い。今回我々はこの症例を経験したことにより、MMGとUSの利点や弱点を理解し、ガイドラインに沿った評価ができるような画像の描出に努めることが重要であると再認識した。その上で両検査を併用することにより、乳がん検診の精度向上が可能であると考えられる。

連絡先 053-439-1114